



「小児歯科口腔外科の臨床の現状とその展望」

大分医科大学教授

清水 正嗣

略 歴

1959年 3月	東京医科歯科大学大学院歯学研究科修了	1967年 5月	東京医科歯科大学歯学部口腔外科学第一講座助教授
1959年 4月	東京医科歯科大学歯学部口腔外科学講座助手	1981年 4月	大分医科大学医学部附属病院歯科口腔外科教授
1961年11月	東京医科歯科大学歯学部口腔外科学講座講師	1983年 5月	BRO,Bonn大学口腔・顎・顔面外科学教室に客員教授として講義・研究滞在
1961年12月	ドイツ連邦共和国政府留学生としてハンブルク大学病院北西ドイツ顎外科学教室(主任:Prof.Karl Schuchardt)に研究滞在	1986年 4月	大分医科大学医学部歯科口腔外科学講座教授現在に至る。

〔講演要旨〕

小児歯科学の成り立ちより考えると、歯科保存学と関連深く設置されてきたので、その性格が、医科の小児科学と性質を類似するかのごとく思われがちであるが、歯科学が外科的臨床科であることと同様に、小児歯科の多くの部分も本来、外科的臨床科であると考えられる。その観点から、今回の講演テーマ、『小児歯科口腔外科』の現状と未来について若干拙論を述べさせて頂く。

ここに特に、従来からある『小児口腔外科』でなく『小児歯科口腔外科』の標題を挙げたわけは、演者の専門分野と関連させて、われわれが、小児歯科領域において何を如何に取り上げているかの現状を、第一に紹介したいからである。これは、ある意味で、私どもの小児歯科学医との共同診療の実践であると考えている。従って現在、小児歯科の診療専門医の臨床領域と重複、移行するものも多いと考えるが、立場を変えての問題提示は、小児歯科学発展に裨益するものも大であろう。

小児歯科口腔外科の臨床において特に強調されることは、その小児患者の治療後、成長に伴う変化の追求、follow検索の大切なことである。それは、従来の我々の臨床においても、しばしば不十分にされていたところで、小児歯科専門の先生方と、我々口腔外科医とが共に手を携えねばならないこれからの重要研究領域である。

(未来への展望) 初めに述べた如く、小児歯科学が外科の一分科であるとするならば、上述の各種疾患領域は、同時にすべて小児歯科の臨床並びに研究対象となるものである。

それ故、これらに対する学問的対応は、従来の口腔外科専門医の臨床研究に加え、小児歯科学の専門医の積極的関与、参加が望まれるところである。更にそれは、小児歯科学の領域拡大、専門医の量的並びに質的向上につながり、患者・国民の期待に応えるところの大きい、輝ける未来に繋がるであろうと考察する。